巻　頭　言

別府大学日本語教育研究センター長
松　田　美　香

別府大学日本語教育研究センターが2009年４月に設立されてから、今年度で７年になり、これまで行ってきた改革も軌道に乗った感があります。

２年目を迎えた「日本語能力試験N1」受験者支援（学内の学生支援GP）の結果、ビジネス科目Ｂ群の受講者数が増加し、N1受験者数の増加という好ましい結果を得ました。N1合格者の割合はまだまだ高いとは言えませんので、より一層の努力が課題です。

さて、『別府大学日本語教育研究』も本号で第６号となります。学内研究GP「語学教育におけるプレイスメントテストの効果的な活用と教育効果の測定に関する共同研究」では、７月の成果発表会や今年２月に本学で開催した県立広島大学の中石ゆうこ先生の講演会（ワークショップ）「日本語学習者が視覚的に『わかる』教材づくり―自動詞・他動詞を例として―」、そして教養英語担当の三重野先生が九州地区大学教育研究協議会で「別府大学教養英語共通テストの解答傾向分析」を発表するなど、研究発表活動も活発に行うことができました。今回も本紀要には学外・海外の先生方からの御寄稿が掲載されることとなりました。これも、関係各位の御協力の賜物と心より感謝いたします。

昨年も書きましたが、引き続き近隣諸国との関係は予断を許さない状況が続いています。本学での日本語教育が、学習者の日本文化の深い理解につながっていくようにと願ってやみません。学習者の個性や可能性を尊重してその成長に寄与するものでありつづけること。本センターは、そのための努力を惜しまず、邁進していくことを誓います。

最後になりましたが、本号の刊行にあたって御支援をいただいた方々に、この場を借りて厚く御礼申しあげます。

平成28年３月31日